

■福田須磨子 詩人。被爆による病のなか、新聞投稿詩が大反響、以後、病状悪化と闘いながら被爆者代表としても活動。

ふくだすまこ

水平社結成・1922＝ 長崎市浜口町で、青果卸商福田猶次郎の次女に生まれる。母はサキ。

家は使用人が多かった。

満州事変・・1931＝ 9歳：

帝人疑獄事件1934＝12歳：小学校6年生の時、担任教師に抵抗して一人でストライキをした。

県立長崎高等女学校に進み、文学書を読みあさる。

日中戦争始・1937＝15歳：

第二次大戦始1939＝17歳：同校を卒業し、西彼杵郡高浜小学校の代用教員となるも、

大政翼賛会・1940＝18歳：1年で退職、同校教師と結婚するが、間もなく離婚。

日米開戦・・1941＝19歳：

年金+総武装 1944＝22歳：長崎男子師範学校の会計係としてつとめ、

敗戦・・・1945＝23歳： 師範学校で被爆、父母と姉を失う。

戦後、事務員・女店員・ブローカー・女給など職業を転々とする。

三大事件・・1949＝27歳：

独立回復・・1951＝29歳：

55年体制始・1955＝33歳：*被爆による紅斑病となるも、内職を続けながら、朝日のひととき欄に掲載された詩が大反響、
国連加盟・・1956＝34歳：_ガリ版刷りの詩集「ひとりごと」を自費出版、

インスタント・1958＝36歳：*毎日新聞記者梅田之らの尽力で、第二詩集「原子野」を刊行、時の人となる。

安保闘争・・1960＝38歳：_入退院を繰り返しながら、自らの苦境が多くの被爆者に共通のものであることを知り、
安保闘争に病おして参加、被爆者代表の一人として上京するなど、諸運動に積極的に参加。
_病状が次第に悪化して行くなか、

TV宇宙中継始1963＝41歳：_第三詩集「烙印」刊行、

大学紛争始・1965＝43歳：_被爆体験記「生きる」を刊行、

美濃部都知事1967＝45歳：_手を入れた「われなお生きてあり」刊行。厚生省の原爆白書に反撥する市民・被爆者の運動に共感し、

霞ヶ関ビル・1968＝46歳：

全共闘ビル・1969＝47歳：*{長崎の証言}創刊号にエッセイを書き、以後、寄稿続ける。「われなお生きてあり」で第9回田村俊子賞。
この間、大阪に在住し、

_入退院続く日々を、

石油ショック1973＝51歳：*{女の系譜}にエッセイ「氷雨降り続く」に書き留めて、

角栄金脈辞任1974＝52歳：_没した。

翌年、須磨子の詩碑が原爆落下点松山公園に建立された。

インターネット、